

マルクス=エンゲルス全集版

剰余価値学説史

9

資本主義の発展と剰余価値

労働と剰余価値の発生

剰余価値の分配と階級闘争

剰余価値学説史 (9) (全9冊)

一九七一年二月二七日第一刷発行

定価はカバーに表
示してあります

訳者◎

岡崎 次郎
時 永 淑

発行者

東京都文京区本郷二丁目十一番九号
小林 直 衛

印刷者

東京都新宿区水道町二十九番地
山 元 正 宜

発行所

東京都文京区
本郷三丁目九
株式 会社

大 月 書 店

電話(813)四六五一(代表)
振替 東京 一六三八七

落丁・鼠丁本はお取替いたします

三晃印刷・田中製本

国 民 文 庫

26

剰 余 価 値 学 説 史

(『資本論』第四卷)

(9)

カール・マルクス 著
岡 崎 次 郎 訳
時 永 淑



大 月 書 店

目 次

第二四章 リチャード・ジョーンズ……………	九
一 『富の分配と税源とに関する一論』。ジョーンズにおける諸生産様式の歴史的相違にたいするセンス。地代論の個々の問題においてのリカードにたいする彼の優越……………	九
二 『……経済学序講……』。「国民の経済的構造」の概念。「労働財源」に関するジョーンズの混乱……………	三五
三 リチャード・ジョーンズ『国民経済学教科書』、ハートフオード、一八五二年……………	四五
(a) 資本に関するジョーンズの所説。生産的労働と不生産的労働とについての彼の見解……………	四五
(b) 資本主義的生産が生産力の発展に及ぼす影響に関するジョーンズの所説。追加强定資本の充用可能性の諸条……………	

件について……………六八

(c) 蓄積および利潤率に関するジョーンズの所説。剰余価値の源泉について……………九一

補 録

収入とその諸源泉。俗流経済学……………一〇三

一 資本主義的生産の基礎の上での利子生み資本の発展。資本の一呪物形態としての利子生み資本。資本金子に関する俗流経済学者たちおよび俗流社会主義者たちの所説……………一〇三

二 産業資本との関係における利子生み資本と商業資本。より古い諸形態。派生的な諸形態……………一二七

三 種々の収入という形態での剰余価値の個々の部分の分割。利子と産業利潤との関係。最高度に呪物化された諸収入形態の非合理性……………一三五

四 剰余価値の本質——剰余労働——からの剰余価値の諸転化形態のいっそうの分離。「資本家の労賃」としての産業利

潤	149
五 古典派経済学と俗流経済学との本質的な相違。商品の市場 価格の構成要素としての利子と地代。利子および地代の非 合理的な諸形態に合理的な外観を与えようとする俗流経済 学者たちの試み	177
六 プルドンの利子反対論。利子と賃労働制度との関連につい ての彼の無理解	225
七 利子反対論においてプルドンを越えるルターの優越。資本 主義的諸関係の発展につれての利子観の変化	233
注 解	249
解 説	259
文献目録	1
人名索引	20
度量衡および通貨表	33
事項索引	34

『剰余価値学説史』 各冊目次（全九冊）

文庫版(1)

序文

手稿『剰余価値に関する諸学説』の内容目次
一般的覚え書き

第一章 サー・ジェームズ・ステュアート。

「譲渡にもとづく利潤」と富の積極的
増加との区別

第二章 重農学派

第三章 A・スミス

文庫版(2)

第四章 生産的労働と不生産的労働とに関する
諸学説

文庫版(3)

第五章 ネットケル。資本主義における階級対立
を貧困と富との対立として示す叙述

第六章 余論。ケネーによる経済表

第七章 ランゲ。労働者の自由に関するブルジ

補 録

ヨアの「自由主義的見解にたいする論
難

文献目録、人名索引

(1) (3)は全集第二六巻第一分冊)

文庫版(4)

第八章 ロートベルトウス氏。余論。新しい地

代論

第九章 いわゆるリカードの法則の発見の歴史
に関する覚え書き。ロートベルトウス

に関する補足的覚え書き（余論）

第一〇章 費用価格に関するリカードおよびA・

スミスの理論（反論）

A 費用価格に関するリカードの理論

B 費用価格に関するスミスの理論

文庫版(5)

第一章 リカードの地代論

第二章 差額地代の表とその説明

第三章 リカードの地代論（結び）

第四章 A・スミスの地代論

第五章 剰余価値に関するリカードの理論

A 利潤および地代に関するリカードの
所説

B 剰余価値に関するリカードの所説

文庫版(6)

第一六章 リカードの利潤論

第一七章 リカードの蓄積論。その批判(資本
の根本形態からの恐慌の説明)

第一八章 リカード雑論。リカードの結び(ジョ
ン・バートン)

A 総所得と純所得

B 機械 機械が労働者階級の状態に及
ぼす影響に関するリカードとバート
ンの所説

補 録

文献目録、人名索引

(4)~(6)は全集第二六卷第二分冊)

文庫版(7)

第一九章 T・R・マルサス

第二〇章 リカード学派の解体

文庫版(8)

第二二章 経済学者たちにたいする反対論(リカ
ードの理論を基礎とする)

第二三章 ラムジ

第二三章 シェルビュリエ

(7)~(9)は全集第二六卷第三分冊)

「第二四章」 リチャード・ジョーンズ

〔一〕『富の分配と税源とに関する一論』。ジョーンズにおける諸生産様式の歴史的相違にたいするセ
 ンス。地代論の個々の問題においてのリカード
 にたいする彼の優越〕

R・ジョーンズ師『富の分配と税源とに関する一論』、ロンドン、一八三一年、第一部、地代。

すでにこの地代に関する最初の著書でさえも、サー・ジェームズ・ステュアート以来のすべてのイギリスの経済学者に欠けているものによって、すなわち諸生産様式の歴史的相違にたいするセンスによって、傑出している。(このような、だいたいにおいての歴史的諸形態の正しい区別は、ジョーンズにたいして指摘された非常に重大な考古学的、言語学的、歴史的誤謬と矛盾しない。たとえば、『エディンバラ・レビュー』、第五四卷、第四論文を見よ。)

(391)

彼は、リカード以後の近代の経済学者たちにあつては地代が超過利潤として規定されているのを見いだしたのであるが、この規定の前提は、農業者が資本家であつて（または農業資本家が土地を利用して）この特殊な資本充用にたいして平均利潤を期待しているということであり、農業そのものが資本主義的生産様式のもとに包摂されているということである。要するに、土地所有は、ここでは単に、社会の支配的な生産関係としての資本がそれに与えた転化した姿において、すなわちその近代的ブルジョアの形態において、とらえられるのである。ジョーンズは、けつして、資本が世界の始まりから確立されていたというような妄想を共にしてはいないのである。

地代一般の根源に関する彼の見解は、次の諸命題に要約される。

「人類の最も幼稚な労働にたいしてさえも耕作者が必要とするよりも多くをもたらし、それによつて彼が貢税を支払うことを可能にするような、土地の能力、これが地代の根源である。」（四ページ。〔岩波文庫版、鈴木鴻一郎訳『地代論』、上、六四ページ。〕）「だから、地代の根源は、人民の大部分がどんな条件のもとでも土地を耕さなければ餓死せざるをえないというような時代における土地の占取にある。そして、そのような時代には、道具や種子などから成っている彼らの貧弱な資本は、農業以外のどんな職業においても彼らの生計を確保するにはまったく不十分であるために、不可抗力的な必要によつて彼らとともに土地に縛りつけられているのである。」（一一ページ。鈴木訳、上、七一ページ。）」

ジョーンズは、地代を、夫役というその最も原始的な姿から近代の〈借地地代〉農業者地代〔farmers rent〕に至るまでのすべての変遷をつうじて、追跡している。彼は、どこでも、労働とその諸条件との一定の形態には、地代の、すなわち土地所有の、一定の形態が対応する、ということを見いだしている。すなわち、順々に、労働地代または農奴地代、労働地代から生産物地代への変化、分益農地代、ライオット地代⁽¹⁰⁴⁾、等々が考察される——とはいえ、この発展の詳細はここではわれわれに関係がない。すべての比較的古い形態では、資本家ではなく土地所有者が他人の剰余労働の直接的取得者として現われる。地代（重農主義者たちにとっては回想によってとらえられているそれ）は歴史的には（今日なおアジア諸民族にあっては最大の規模で）剰余労働の、すなわち無償で行なわれなければならない労働の、一般的な形態として現われる。この場合には、資本の場合とはちがって、この剰余労働の取得は交換によって媒介されてはいないのであって、その取得の基礎は社会の一部分による他の部分にたいする暴力的支配（したがってまた直接的奴隸制や農奴制や政治的従属関係）である。

われわれがここで土地所有を考察するのは、ただ、その把握が資本の把握の条件となるかぎりでのことだから、われわれはジョーンズの展開は簡単にすませて、直ちに、彼を非常に有利にすべての彼の先行者から区別している結論に進むことにしよう。

前もってもう少しばかり付帯的なことを述べておこう。

夫役——および多かれ少なかれそれに対応する農奴制（または奴隸制）の諸形態——につい

(392)

ては、三二二二ジョーンズは、無意識のうちに、すべての剰余価値（剰余労働）が帰着するところの二つの形態を強調している。総じて特徴的なのは、最も残酷な形態における本来の夫役が賃労働における本質的なものを最も明瞭に示しているということである。

「地代が」（夫役の場合に）「このような事情のもとで増加させられうるのは、ただ、借地人の労働がより巧妙により有効に充用されるが」（『相対的剰余労働』）「しかし農業の科学を促進することにはたいする土地所有者の不適當さの実体として充用されるということによるか、または、強要される労働の量がふやされて、所有者の土地がより良く耕され、労働を搾取される農奴たちの土地がそれだけ不良に耕される場合だけである。」（同前、第二章、「六一ページ」）。〔鈴木訳、上、一二三／一二四ページの要約。〕

地代に関するジョーンズのこの著書を、第二項で述べる『講義要綱』から区別するものは、次のことである。第一の著書のなかでは、彼は、与えられたものとしての土地所有の種々な形態から出発する。第二の著書のなかでは、それらの形態が対応するところの労働の種々な形態から出発する。

ジョーンズは、これらの種々な生産関係には労働の社会的生産力の発展における種々な程度が対応する、ということをも示している。

夫役は（奴隷労働とまったく同様に）地代に関しては次のことを賃労働と共通にしている。すなわち、地代は労働で支払われ、生産物では支払われず、なおさら貨幣では支払われないと

いうことである。

「分益農地代」の場合には、「土地所有者による資財の前貸と、現実の労働者への耕作管理の委任とが、中間の資本家階級の恒常的欠如を示している。」（七四ページ。「鈴木訳、上、一三七ページ。」）

「ライオット地代は、自分自身の労賃を土地から取り出す労働者がその土地の所有者としての主権者に支払う生産物地代である。」（第四章、「一〇九ページ」。「鈴木訳、上、一七五ページ。」）（特にアジア。）「ライオット地代はしばしば労働地代や分益農地代と混同される。」（一三六ページ以下。「鈴木訳、上、二〇二ページ以下。」）「この場合には」主権者が主たる地主である。「アジアでは諸都市の繁栄は、またむしろそれらの存在さえもが、まったく政府の地方的支出から生ずる。」（同前「二三八ページ」。「鈴木訳、上、二〇五ページ。」）「コティア地代⁽¹⁰⁵⁾というのは……彼ら自身の生計の資を土地から引き出している借地農民が契約によって貨幣で支払うべきすべての地代である。」（一四三ページ。「鈴木訳、上、二一ページ。」）（アイアランド）「地上の最大の地域で貨幣地代は存在しない。」

「すべてこれらの形態」（農奴、ライオット、分益農、コティア、等々、要するに農民の地代）「は土地の生産力の十分な発展を妨げる。」「産業の生産性における差は、第一には、手労働を充用するために産業が使用する設備の量にあり、第二には、単なる肉体的な働きが過去の労働の蓄積された成果によって助けられる程度、つまり生産の作業に応用される技能や

(393)

知識や資本の種々な量によって助けられる程度にある。……「非」農業階級の少人数。農業労働をなすことなしに維持されうる人々の相対的な数はまったく耕作者たちの生産力によって計られなければならない、ということとは、明らかである。」(第六章、「二五七—一六〇ページ」)。(鈴木訳、上、一二五—一二七ページ)。「イングランドでは、農奴の労働が使われなくなったとき土地所有者たちの地所の耕作を引き受ける借地人たちが農村で見いだされた。彼らは自由農民」[yeomen]だった。」(同前「二六六ページ」)。(鈴木訳、上、一二三四ページ)。「われわれは、ついに、われわれにとってここで決定的に興味のある点に、すなわち農業者地代」[Farmers' Rents]に、到達する。これこそは、ジョーンズの優越が明確に現われる点である。というのは、彼はリカードやその他の人々が土地所有の永久の形態としてとらえているものをそのブルジョア的な形態として指摘しているからであって、この形態がそもそもはじめに出現するのは、(1)土地所有が、生産を、したがってまた社会を支配する関係ではなくなったときのことであり、(2)農業そのものが資本主義的に経営されるようになったときのことであって、これは都市の産業における大工業の(少なくともマニファクチュアの)発展を前提するのである。ジョーンズは、リカード的な意味での地代はただ二一二三—資本主義的生産様式を基礎とする社会にのみ存在する、ということを示している。地代の超過利潤への転化とともに、土地所有の賃金への直接的影響もまたなくなるのである。これは、言い換えれば、土地所有者が剰余労働の直接的取得者ではなくなって、今や資本家がそれである、ということ

にほかならないのである。地代の相対的な大きさは、ただ資本家と土地所有者とのあいだでの剰余価値の分割に関係があるだけで、その剰余労働の搾取そのものには関係がないのである。この点は、ジョーンズにあっては、明言されてはいないが、事実上明らかなのである。

ジョーンズは、歴史的な説明によっても、経済的な詳論においても、リカードにたいして本質的に進歩している。われわれは彼の理論を一步一步追跡してみよう。そこにはもちろん誤謬もまじっている。

次の諸命題のなかでジョーンズは、地代が超過利潤であるための、または近代的地土地所有の表現であるための、歴史的および経済的諸条件を正しく説明している。

「農業者地代は、社会の種々な階級の最も重要な諸関係が土地の所有および占有から生ずることをやめたときに、はじめて存在することができる。」（一八五ページ。〔鈴木訳、下、一一ページ。〕）

資本主義的生産様式はマニファクチュアに始まって、あとからはじめて農業を自分に従属させる。

「最初に資本家の管理のもとに身を置くのは手工業者や職人である。」（一八七ページ。〔鈴木訳、下、一一ページ。〕）「この制度の直接の結果は、農業で使用されている労働と資本を任意に他の職業に移す能力である。」

「そして、この能力とともに、はじめて農業利潤と工業利潤との均等化が問題になりうるので